読売 俳壇

矢島渚男 選

この窓に月の道あり月を待つ　羽村市　竹田　元子

【評】「この窓」は居間の窓だろう。毎年名月の晩にはお月さんが通ってくれる場所。明晰な句だ。

肌寒や発掘の刷毛さらさらと　青梅市　松野　英昌

【評】一日快晴で仕事も進んで湿り気もなく、土器を撫でる刷毛もさらさらと気持ちよく土をはじく。でも夕暮れはさすがに肌寒くなってきた。

耳奥にじんたの微か暮の秋　京都市　吉田　基子

【評】昔サーカスの客寄せなどで聴いたジンタの音が耳に沁みついている人。今度伝記映画が出来た中山晋平なども初めて耳にした西洋音楽は、ジンタだったという。活気の底に哀愁の調べ。

いつ行くかより誰と行く紅葉狩　東京都　山田真理子

名を知りていよよ可愛い秋の草　玉野市　北村　和枝

干し物のよくたたまれて日向ぼこ　仙台市　内海　恵子

うつくしい花の名のやうひだんきやう　入間市　古屋　冴子

紅葉狩渓谷からの硫黄臭　一関市　高橋紗千子

予定なきひと日秋雲眺めゐる　伊勢崎市　川野　忠夫

十五代柿右衛門窯柿熟るる　長崎市　前田　尚人

高野ムツオ 選

村芝居老女ばかりの七福神　高砂市　宮田　悦子

【評】村芝居の七福神の役は高齢の女性ばかりだという。過疎化が進む村によくありそうな場面だが、その福を呼ぶ舞姿の、楽しげだが、実に物悲しいこと。

寄らば濃く散らば透けるや椋の群　江別市　北沢多喜雄

【評】横に広がったり縦に縮んだりしながら、夕空を横切っていく椋鳥の大群のさまが実に鮮明。動体視力の高い人に違いない。

それぞれのテーブルにある秋夕焼　福島市　横山ひろこ

【評】高階のレストランあたり。まだ来客はないが、照明が点り、テーブルにはナイフやフォークが並ぶ。晩餐が始まる前の束の間の秋夕焼け。

鰯雲土砂災害のその空に　川崎市　久保田秀司

杖止めて杖と眺むる鰯雲　牛久市　中村　栄子

踏む神と踏まるる邪鬼の夜長かな　松山市　三木須磨夫

飛行機の音はすれども秋の天　横浜市　井上　誠一

石あればとんぼうの伏す家郷かな　東京都　望月　清彦

終着駅より始まれる紅葉山　神奈川県　中島やさか

震度4に続く震度5おけら鳴く　大阪市　今井　文雄

正木ゆう子 選

天高くロシア語講座あえて聴く　前橋市　西村　晃

【評】戦争に於いて、特定の言語に罪はない。言語は人より永い。「天高く」にはそんな希望が見える。モスクワで俳句の朗読をした時、翻訳の発音を音楽のように美しいと思った。

しばらくは用なき雨の刈田かな　神戸市　藤生不二男

【評】一年中何かと手を入れなければならない田に、しばらくは行く用がない。刈り終えた田を今日は静かに雨が潤す。「用なき」に実感あり。

唐辛子だった勝手に生えてきた　東京都　大岩　真理

【評】何か生えてきたと思ったら、唐辛子が生った。庭があると、そんな事もある。私の友人宅では何故だか通草が実ったという。種は逞しい。

ちちははの下野顔よ刈田道　東京都　吉田　鉄瓶

あるはずの角振る鹿や脚広げ　北本市　萩原　行博

小春日や夜の来ること忘れさう　横浜市　菅沼　葉二

満州の十月遥か誕生日　横浜市　三上　光子

言ふなれば大秋灯やスタジアム　東大和市　板坂　寿一

冷まじや一夜に大気入れかはり　久喜市　利根川輝紀

椋鳥の大きな束の欅かな　仙台市　佐藤　庄陸

小澤實 選

子の音読が秋刀魚焼く厨まで　伊勢市　藤田ゆきまち

【評】子どもが教科書を読む声が、秋刀魚を焼いている台所まで届いている。おそらく秋刀魚を焼く匂いも子どもの部屋まで届いて、子どもの音読を励ましているのだろう。

ピアスの子夜学の一番前の席　新居浜市　寺村　洋子

【評】耳にピアスをつけた、おそらく女の子が、夜学の一番前の席に座って授業を聞いている。席を示したことで、その子のやる気を示したのだ。

水澄むや鈴振る巫女の細き腕　日立市　菊池二三夫

【評】水澄む頃、巫女が細き腕を振り上げて、鈴を振っている。季語がよく映えている。句にちりばめられているSの音に、鈴の響きが感じられる。

縄文の人らの虫歯栗たわわ　川崎市　三浦　直子

ゆび笛に犬振り向きぬ柿日和　川崎市　折戸　洋

地下鉄に乗らず頓堀歩く秋　泉佐野市　向井克之介

手の届きたれば実石榴頂戴す　新居浜市　近藤貴美子

樽酒で活を入れたり秋祭　川崎市　関　直彦

新涼や犬と分け合うヨーグルト　弘前市　長利　冬道

老猫は眠ってばかり木守柿　高岡市　池田　典恵

枝しおり 折

片上長閑著『うしろすがたの記』

著者が関心を持つ石井露月ら17人の俳人の生涯と句をたどる第1評論集。俳人たちの創作の原点にあった風景が爽やかによみがえる。〈草枯や海士が墓皆海に向く　石井露月〉

（田畑書店、2750円）

SHUN歌集『月は綺麗で死んでもいいわ』　新宿・歌舞伎町の元ホストで現在はすし職人として働く歌人の第1歌集。新宿という町の異様さをのみ込む、繊細な歌が並ぶ。〈ゆうだちに傘をたたんで空を見る何してんだろ、睫毛がうざい〉

（新潮社、1815円）

◆第39回俳壇賞＝市村栄理「ブレス記号」（30句）

◆第36回歌壇賞＝津島ひたち「風のたまり場」（30首）

◆第50回現代歌人集会賞＝堀静香『みじかい曲』（左右社）

◆第12回現代短歌社賞＝上川涼子「水と自由」（300首）

題字デザイン・イラスト　福田美蘭